

さんしゃ Zapping

Vol. 32 No. 1 (通巻 185 号)

2017 年 5 月

＜産社学会 ニューズレター＞

編集・発行：立命館大学産業社会学会（教員・院生委員会）

事務局：産業社会学部共同研究室

TEL (075) 465-8186 E-mail: s-kyoken@st.ritsume.ac.jp

<http://www.ritsume.ac.jp/gsss/research/newsletter.html/>

〔 目 次 〕

＜新任紹介＞

着任のご挨拶	松島 綾	p. 2
着任のご挨拶	丹波 文紀	p. 3
着任のご挨拶	柏木 智子	p. 5
着任のご挨拶	石田 賀奈子	p. 7
着任のご挨拶	金澤 悠介	p. 10

< 新任紹介 >

着任のご挨拶

まつしま あや
松島 綾



2017 年 4 月 1 日より産業社会学部
言語・国際教育でお世話になっており
ます松島綾(まつしまあや)と申します。
英語科目ならびに「カルチュラル・スタ
ディーズ」担当しております。着任して
以来、多くの先生方や職員の方々にあ
たたかく迎えていただき、感謝しており
ます。この場をお借りしてお礼を申し上
げます。

私は生まれも育ちも福岡県太宰府市
です。初めて故郷を離れたのは高校 1
年生の 1 月からのニュージーランド留
学でした。1年間 800 エーカーの農場

を持つお宅にホームステイしながら現
地の高校に通いました。ここでの経験
が現在の私の教育・研究の原点だと言
っても過言ではありません。他国に住
むことでその国の社会や文化について
多くのことを学んだと同時に、留学後に
経験した「異国」としての日本に戸惑い、
コミュニケーション学に興味を持つよう
になりました。日本での大学院博士前
期課程終了後アメリカの大学院に進学、
その後アメリカで20年近く生活し、日本
には 3 年前に熊本県にある熊本学園
大学への着任を機に戻りました。

さて、私の専門ですが、コミュニケー
ション学の中でもビジュアル・レトリック
が専門で、広義で捉えたメディアとアイ
デンティティ構築の研究をしています。
最近の研究では表象と可視性のみが
主体の構築につながるのではないこと
を被害者・弱者の表象を通して分析し
ました。例えば嫌韓流の現象をポストコ
ロニアルな視点から考察することにより、

嫌韓流が不可視的領域に押しやる日本人性がナショナル・アイデンティティとして構築されていく過程や、長崎原爆資料館の訪問者が「見る」と「見られる」ことの両義的な役割を与えられ主体を「見る」から「見られる」に転換させることにより、「人」ではなく「物」が語る戦争被害の背後に立つ半透明な主体の位置を獲得する過程を考察しました。また、韓国のポピュラー・カルチャーに圧倒され続けている日本のソフトパワーをアジア中心に焦点を定めて展開する日本政府の「クール・ジャパン・プロジェクト」を日本とアジア、そしてアメリカと

の関係も視野に入れ、ナショナル・アイデンティティが三項対立により構築される課程を考察しました。

現在は主に 2 つの研究テーマを模索しており、その一つでは「現代日本社会における家族とは何か」という問いを立てメディアにおける表象を分析しております。これからも研究に励むと同時に、そこでの学びを学生に還元できるよう努めていきたいと思っております。ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

たんば ふみのり
丹波 文紀



4 月より人間福祉専攻に着任致

しました丹波史紀（たんばふみのり）と申します。主として「社会福祉概論」を担当しています。今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

元々は愛知県の出身です。大学院時代から名古屋市の知的障害児施設で職員をするなどしてきました。その後、名古屋の専門学校や姫路市の短大などを経て、前任の福島大学で 13 年間教鞭を執っております。

専門は、社会福祉政策や貧困・低所

得問題を中心にしています。各国の福祉政策が就労と結びつく、いわゆる「ワークフェア政策」を展開するなかで、日本でも就労と福祉を結びつけた政策を進めています。その一つである母子家庭等のひとり親家庭に対する就労・福祉政策について調査研究などをしてきました。例えば、就労支援を受けたシングルマザーの経年調査をすることによって、実際にひとり親家庭の貧困脱却に就労支援策が効果を発揮しているのかを検証するなどしてきました。

さらに、2004年に福島大学に赴任した際に新潟県中越地震が発生し、学生たちと一緒に全村避難した旧山古志村（現長岡市山古志地区）の住民に対する支援活動をした経験をし、その後も災害時に支援活動や調査研究などをしてきました。とりわけ2011年の東日本大震災では、福島県が地震・津波・原子力災害と大きな被害を受けたことから、発災後の支援活動をはじめ、被災自治体の復興計画策定、住民の皆さんと一緒に市民活動のネットワークづくりなどにも取り組んできました。

このように社会福祉をベースにしながら、その時々社会問題に目を

向け、かつ実践的な解決や組織化に取り組んできたこれまででした。立命館大学産業社会学部は、社会学をベースにしながら学際的に現代の社会的諸課題を探究する歴史を持つ学部であると理解しています。その点で、福祉領域に限らず、様々な研究領域の先生方と共に研究することができていることを非常に楽しみにしています。

また、産業社会学部において、学生の教育にも努力してまいりたいと考えています。常に新たな現代社会の諸課題を見すえ、その課題を解決する主体的な学びと、課題解決の担い手になるような教育に心がけていきたいと思います。社会福祉領域は、常に社会的困難をかかえた個人と家族を対象にしています。学生には、人権の尊重と困難を自らが解決していくエンパワーメントの視点を持って、教育していきたいと思っています。

まだ個人的にはさらに一層教育・研究に努力していかなければならないと考えておりますので、ご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。以上、簡単ではございますが、赴任の挨拶にかえさせていただきます。

着任のご挨拶

かしわぎ ともこ
柏木 智子



みなさま、こんにちは！本年度 4 月よりお世話になっております柏木智子（かしわぎともこ）と申します。子ども社会専攻に所属しており、将来先生になりたい、あるいは教員免許を取りたい方々への授業を主に担当させていただきます。

大阪大学大学院人間科学研究科で学位を取得後、非常勤講師をしながらしばらくは出産と育児に専念しました。その間に、子育てにたっぷり時間を注げる主婦の楽しさと、毎日育児と家事とに追い回されて出口の見えな

くなるようなしんどさを味わいました。また、ママ友とのネットワークづくりにもいそしました。ママ友とは、ランチやモーニング（モーニングとは、子どもを幼稚園や保育園のようなところに預けるとそのままどこかのお店でおしゃべりを始め、時には子どもが帰る時間になるまでしゃべり続ける）をしながら、そんな楽しい過ごし方をする世界があることを知りました。おかげで、浦島太郎のようになり、研究をしばらく忘れたこともありましたが、下の娘が 3 歳の時に、日本学術振興会特別研究員 RPD として復帰しました。

その後、大阪国際大学短期大学部では、秘書や観光ビジネスに関する資格取得のコースに所属しました。先生方がとてもきれいで華やかで、私もその真似をしてみたくくなりました。でも、背中に大きな三角定規をあてながら、15 度、30 度、45 度のおじぎをつかいこなせるようにする授業を見ていると、華やかさの裏に確かな努力があることを知りました。結局、私はそうしたマナーや礼儀作法を身に付けることはでき

ませんでした。そこでの教員生活は得るものの多いとても楽しい時間でした。

次に、大手前大学では、教職担当として授業をしながら、「子ども食堂」プロジェクトを立ち上げました。「子ども食堂」プロジェクトは、経済的事情で大学進学をあきらめたり、大学という存在をそもそも知らなかったりする子どもたちに、大学で楽しい時間を過ごしてもらい、将来の選択肢の幅を広げてもらいたいという思いから始めました。子ども食堂は近年広がりつつありますが、大学構内で実施するというのはまだまだ珍しく、いくつかの新聞で取り上げてもらいました。小さな大学でしたので、全学部からプロジェクトを実施してくれる学生のボランティアを募集し、集まってくれた30人ほどの学生さんと一緒に何とか実施にこぎつけられたのは、とても素敵な思い出になっています。

私は、学生時代・院生時代からこうしたいろいろな経験をするのが大好きで、すべての経験が宝となっています。この立命館大学では、今後どんな出会いがあり、どのようなことができるのか、わくわくしています。私の主な研究テーマは、コミュニティづくりや子どもの貧困で、教育学の視点からそれら

について考えようとしています。子どもたちの学びを豊かにするための学校と地域との連携について追求するうちに、学校を軸にコミュニティが形成されていくところに関心をもつようになりました。曖昧模糊とした地域やコミュニティが面白くて、どんどん教育学から離れてしまい、どこに向かっているのかがわからなくなったこともありました。今は、教育を通じてのコミュニティづくりについて、ソーシャル・キャピタル概念を用いて考えようとしています。

地域を研究していると、そこで疎外されがちな子どもに関心をもつようになりました。それが子どもの貧困研究を始めたきっかけです。社会的剥奪状態にある子どもたちをせめて学校で包摂することができたら、そもそも学校とはそういう場所なのでは、と考えたいのですが、学校というのは再生産を促進したり、うまく適応できない子どもたちを疎外したりする場所でもあり、そういう学校のあり方をどう変えればいいのかを研究しています。そして、学校だけではなく、地域が包摂的な場所となるための調査をしています。

学生・院生のみなさま、教員のみなさま、今後出会うみなさまとたくさん語り、新たな研究や活動プロジェクトと一緒に取り組めることを願っており

ます。また、学生・院生のみなさまには、
さまざまな体験をできるための後押し
をしていきたいなと思っています。どう

か今後ともよろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

いしだ か な こ
石田 賀奈子



2017 年 4 月から人間福祉専攻でお世話になっております、石田賀奈子(いしだかなこ)と申します。今年は「家族関係論」のほか「基礎演習」「社会福祉援助技術演習」を担当させていただいております。3 月まで神戸市西区にある神戸学院大学総合リハビリテーション学部で「児童福祉論」を担当していました。

「以学館に産業社会学部がある」と

いうことだけでなく、学内のことでもまだまだ戸惑うことも多く、諸先生方や事務関係のみなさまにご負担をおかけしておりますが、人間福祉専攻の先生方はじめ、ご関係のみなさま方に温かく迎え入れていただきましたこと、心より感謝申し上げます。

家に帰ると、3 歳上の夫と、4 歳の娘と0歳の息子の 4 人家族です。夫はろう者で、まったく音がわからないレベルですので、家庭での言語は日本手話と日本語です。子どもたちは CODA (Children of Deaf Adult) ということになります。息子が 4 月からの保育園入所がうまくいかなかったため、同じ研究棟の先生方には子どものことでご迷惑をおかけしているかと思います。

私は、1977 年生まれ、京都府亀岡市出身です。日本史の教科書に出てくる「石田梅岩」と同じ集落の出身で、片田舎の農村地帯でのびのび育ちました。1995 年に産業社会学部発達福

祉コースに入学しました。当時、学部は恒心館にありました。「くるり」の岸田さんは学部の同級生、佐藤さんは同郷です。コースも違うので在学中に何の接点もなかったのですが、ものに執着がない私ですが、「くるり」の CD だけは在学中から全部買っています。在学中は近畿聴覚障害学生懇談会に出入りし、聴こえない学生への情報保障が大学でどのように行われるべきか、仲間と議論しあうという貴重な経験ができました。

1999 年に産業社会学部を卒業し、大阪市内の社会福祉法人に就職したところ、ろうあ児施設に配属されるはずが、児童養護施設に配属されました。私と児童福祉の出会い、実はここからです。

翌 2000 年に児童虐待の防止等に関する法律が成立しました。児童養護施設等に、虐待を受けて家族と分離され、入所してくる児童が急増した時期でもあります。心理療法担当職員との連携に基づく子どもの PTSD への対応や、無断外泊など問題行動を繰り返す子どもへの支援に奔走していました。2001 年に児童養護施設に入所していた児童が外泊中に亡くなる事件が尼崎と大阪で相次いで起こりました。私は中高生の児童を中心に支援して

いましたが、被虐待児や家族への支援についてより専門的に学ばないと、このまま試行錯誤を続けていても子どもの最善の利益に資するソーシャルワークは展開できないと考え、関西学院大学社会学研究科に進学しました。

修士課程より一貫して「児童養護施設におけるファミリーソーシャルワーク」のあり方について研究しています。児童養護施設に入所している児童の多くは保護者がおり、家族再統合に向けての支援が必要とされます。しかし、家庭復帰後の虐待の再発も少なくなく、また地域に帰った後の見守りシステムも脆弱です。2004 年より児童養護施設に配置された家庭支援専門相談員がどのようにソーシャルワークを展開することが求められるのか、その専門性を考究しています。

2014 年 3 月までは児童養護施設、児童相談所、またスクールソーシャルワーカーとして現場実践を重ねてきました。かねてから児童養護施設での家族の reunification に強く関心を寄せてきましたが、学校現場でのソーシャルワークを展開する中で、児童虐待への intervention、あるいはハイリスクファミリーへの prevention をどのように行うかということも考えていく必要があるように思えるようになりました。子どもの

育ち、そして子どもを育てる家族への支援について、ライフサイクルを見通した支援を展開するための方法論の確立を目指していきたいと思っています。現在採択されている科研費(基盤研究(C))は「児童養護施設退所児童の地域再統合の在り方に関する研究」ですが、児童養護施設と地域社会が連携し、子どもたちが安全で安心な環境の中で育ちを保障されるためにはどのような支援の仕組みを形成することが求められるのか検討していきたいと考えています。

教育面におきましては、以下の3点を大切にしていきたいと思っています。

- ①演習や自主学習プログラムを通じた学生の主体性、当事者性の涵養
- ②多様で柔軟なアセスメント力・想像力の涵養
- ③他者への受容・共感・エンパワメントの力を高めるためのコミュニケーションスキルの向上

産業社会学部がアドミッション・ポリ

シーとして掲げている「積極的に社会に働きかけて社会問題を解決していく能力」を持つ学生の育成に、「人」とその生活環境としての「社会」、そしてその両者の接点に生じる「交互作用に関わる諸課題」に対して、有効な solution を導き出すことのできる人材育成を目指して貢献したいと考えています。社会の中で生きる人、特に私の専門とする社会的養護の中で育つ子どもたち、そして子どもを取り巻く環境としての家族を対象に、当事者の抱える「生きづらさ」「悲しみ」等に寄り添いつつ、「希望」や「楽しさ」といったポジティブな側面にも焦点をあて、「悲しみや痛み」と「ストレングスや希望」の両方を共有しながら、自らと人々の自己実現を促進できるような人材育成に貢献したいと考えています。皆さまからのご指導、ご鞭撻をいただきつつ、立命館大学に貢献できる人材として成長し続けられるよう、一層精進していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

かなざわ ゆうすけ
金澤 悠介



本年の4月より現代社会専攻でお世話になります、金澤悠介(かなざわ・ゆうすけ)と申します。産業社会学部では「基礎社会学」や「基礎演習」・「プロジェクトスタディ」といった小集団授業を担当しております。また、他学部(現在は法学部・文学部)の教養科目である「社会学入門」も担当しております。

私の出身は島根県松江市なのですが、進学してから先ごろまで18年間にわたり東日本で過ごしてまいりました。大学時代は東京大学文学部で社会

心理学について勉強しておりました。ただ、学部時代に「数理社会学」という授業を受けて、にわかに数理社会学に興味をもち、それを専門的に研究するために、東北大学大学院文学研究科に進学しました。大学院時代はゲーム理論・コンピューターシミュレーションといった数理社会学の方法や社会調査法・統計分析法といった計量社会学の方法も学んだのですが、これらの勉強の内容よりもほぼ毎日友人の家で酒を飲んでテレビゲームをしていたという記憶のほうが強く残っています。どうしてもなくダメな院生だったのだなあ、と今思うと恐ろしくなります。こんなダメ院生だったのですが、2009年9月に立教大学社会情報教育研究センターに学術調査員(ポスドク研究員)として運良く就職し、2010年4月には助教に就任しました。社会情報教育研究センターは当時の立教大学で新設された教育研究支援組織で、社会調査法や統計学のe-learning教材を作成したり、さまざまな学部で社会調査法・統計学を教えた

りするというのが私の主な業務でした。

そして、2014 年 4 月に岩手県立大学総合政策学部へ赴任し、そこでも社会調査法や社会調査実習を担当しつつ、学内非常勤として社会福祉学部で統計学を担当しておりました。立命館大学で担当する科目（「基礎社会学」・「社会学入門」）は今まで担当していた科目（社会調査法・統計学）とは異なりますが、複数の学部で講義を行うということは今までも経験してきたことでありますので、その経験を活かしつつ今後とも教育に精進していきたいと思います。とはいえ、人生の半分を東日本で過ごしており、関西の大学で教えるのは初めてですので、関西の大学のノリにいち早く慣れるように努力していきたいと思います。

次に、私の研究についてですが、特に強い信念のもとではなく、流れにまかせて研究してきた結果、かなり多岐にわたっています。研究への着手時期が古い順に並べると、「コモンズの研究」、「ソーシャル・キャピタルの研究」、「社会意識の研究」という感じですが。「コモンズの研究」は修士論文の頃から扱っていたテーマで、特にコモンズの悲劇 (tragedy of commons) というものを研究しておりました。コモンズの悲劇は自然資源の荒廃メカニ

ズムにかかわる話で、人々が共同で管理する資源（入会林野、里山、地球環境）は他者の適切な資源利用をみこした過剰利用によって荒廃するリスクが存在するという議論です。修士論文ではゲーム理論をもちいたコンピューターシミュレーションによってコモンズの悲劇を防ぐ社会的メカニズムを研究しておりましたが、研究関心がより経験的な方向に変化し、現在では、明治期から昭和 30 年代までに実施された入会林野についての行政調査資料を統計分析し、産業化にともなう人々のコモンズ利用の変化について解明するという研究プロジェクトをすすめています。「ソーシャル・キャピタルの研究」は博士課程後期から着手したもので、他者に対する信頼感の規定要因の研究や社会的孤立の要因とその帰結についての研究などを行いました。現在は、有賀喜左衛門や中村吉治といった昭和前期農村のモノグラフの記述をもとに、当時の集落内のネットワーク構造を再現し、産業化や農業技術の革新にともない農村集落内の人間関係がどのように変容するのかを解明するという研究プロジェクトもすすめています。さいごに「社会意識の研究」ですが、これは立教大学に就職してから着手したもので、大規

模な社会調査データを統計分析することで、社会経済的地位(階層的地位)と社会への評価(満足感、不公平感、階層帰属意識＝社会での自分の位置づけ)の関係を分析しています。現在は、高度経済成長や長期不況といった社会変動がもたらす個人レベルの社会経済状況の変化(失業、親世代と比較した場合の経済状況の変化など)が人々の社会意識にどのような影響を与えるのかに関心を持って、研究をしています。

ということで、自身の研究について簡単に紹介しましたが、紹介している自分でもずいぶん一貫性のない研究をしているなあと感じます。ただ、雑多な研究の中にも、2つのコアみたいなものがありそうだということも書きながら気づいてきました。1つ目のコアは、今までの自分の研究はさまざまな人とのつながりでできているということです。「コモンズ研究」や「ソーシャル・キャピタル研究」は日本の過去の農村を対象とするものですが、これは大学院時代からお付き合いのある農学系の研究者の方たちとの共同研究が1つの契機になっています。また、「社会意識の研究」は出身研究室の先生や先輩とのつながりの中で着手するようになりました。2つ目のコアは社会変動とそ

の帰結を対象とするということです。結果的にそうなったということもありますが、「コモンズの研究」では社会変動にともなう人間と自然の関係の変容、「ソーシャル・キャピタルの研究」では社会変動にともなう人間と人間の関係の変容、「社会意識の研究」では社会変動にともなう社会意識の変容を対象としています。

今年より産業社会学部でお世話になりますが、産業社会学部にはさまざまな研究分野の優秀な先生方が在籍されております。私もその一員として、先生方や学生・院生の皆さんとのつながりを大切にしながら、研究や教育をすすめていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

Zapping 原稿募集

研究会・学会報告の他、留学記、課外活動報告などあらゆるジャンルのご投稿をお待ちしております。

また、いろんな特集も組んでいきたいと思っています。何本かまとめたのご投稿も大歓迎ですので、ご提案がありましたら事務局に申し出てください。形式はタイトル・名前・本文をつけ、1,500字～2,000字程度でお書きください。

原稿は s-kyoken@st.ritsumei.ac.jp に送付して下さいますようよろしくお願いします。